

協同の心で  
明日を拓く

〈特別編〉

世界が認めた協同組合の巨人

# 賀川豊彦がまいた種

賀川豊彦という人を知っていますか？

大正から昭和にかけて、農民運動や救貧・ボランティア活動をはじめ、

多くの業績を残し、その後の協同組合運動だけでなく、

世界の思想にも大きな影響を与えた人物です。解決の難しい課題が

立ちはだかる今日、賀川の足跡とエピソードを紹介します。

文●伴武澄 写真●賀川豊彦記念松沢資料館



賀川豊彦が、生涯の活動の原点とした神戸のスラムに身を投じたのは、一九〇九年の十二月、二十一歳の時です。ちょうど百年の月日が過ぎました。

一九一九年に出版した『涙の二等分』という詩集があります。賀川はスラムに入って間もなく、「もらい子殺し」という商売があることを知り、なにより悲しみました。「もらい子殺し」とは、貧困などの理由で育てられなくなった子どもを五円、十円でもらってきて飢え死にさせる商売です。

ある時、賀川は警察署でもらい子殺し容疑で検挙された産婆が連れていた乳飲み子をもらって育てようとしています。

福祉、教育、医療、生産、労働、協同組合、平和、人権、共生という、わたしたちの暮らしを支える根幹を築くことに生涯をささげた

この子が手に小さな石を握っていたことから「おいし」と名づけました。しかし、おしいは間もなく賀川の腕の中で死んでしまいます。その悲しみを詩にしたのが「涙の二等分」です。

あ？おしいが嘔吐になった

泣かなくなった

眼があかぬ死んだのじゃ

おい、おい、未だ死ぬのは早いぜ

南京虫が——脛すね噛んだ——あ痒かゆい！

当時のスラムは想像を絶する世界。住民は肉体労働者が中心で、物乞い、博徒や売春婦も少なくありませんでした。悪臭漂う生活空間は犯罪の巣窟そうくつであり、伝染病が蔓延していました。子どもたちはいつも空腹にさいなまれ、教育が与えられなかっただけではありません。年ごろになると男子は丁稚ていぢに出され、女の子は身売りの対象となりました。

「貧しい人々とともに生きる」と話したり書いたりすることは簡単ですが、賀川はアメリカ留学を挟んで、約十五年間も神戸のスラムに住み、貧しい人々を支えつづけたのです。そのマザー・テレサのような生きざまは、それだけでもノーベル平和賞の価値があったはず。YMCA生みの親の一人であるアメリカのジョン・モットは賀川を評して、「いまもつともキリストに近い人物」と呼んだのも

不思議なことではありませんでした。

## 友愛の協同組合経済

貧しい人々への共感と慈愛に満ちた賀川がスポットライトを浴びるようになったのは、一九二〇年以降のことです。

自伝小説『死線を越えて』が爆発的に売れ、神戸の川崎・三菱両造船所の争議で時の人となりました。息つく間もなく大阪と神戸に三つの購買組合（生協）を立ち上げ、農民組合を設立します。関東大震災が起こると活動の拠点を東京・本

所に移し、多くのボランティアを組織して被災者救済に乗り出したのでした。いわゆるセツルメントです。

協同組合は、イギリスのロッチデール生協とドイツのライプハイゼン信用組合を二大潮流とします。賀川は生協と信用組合とを組み合わせたのではなく、生産から販売、そして幼児教育から医療、共済といった、人々が生活に必要な事業を網羅して、協同組合で経営しようと考え、それを実践しようとした。

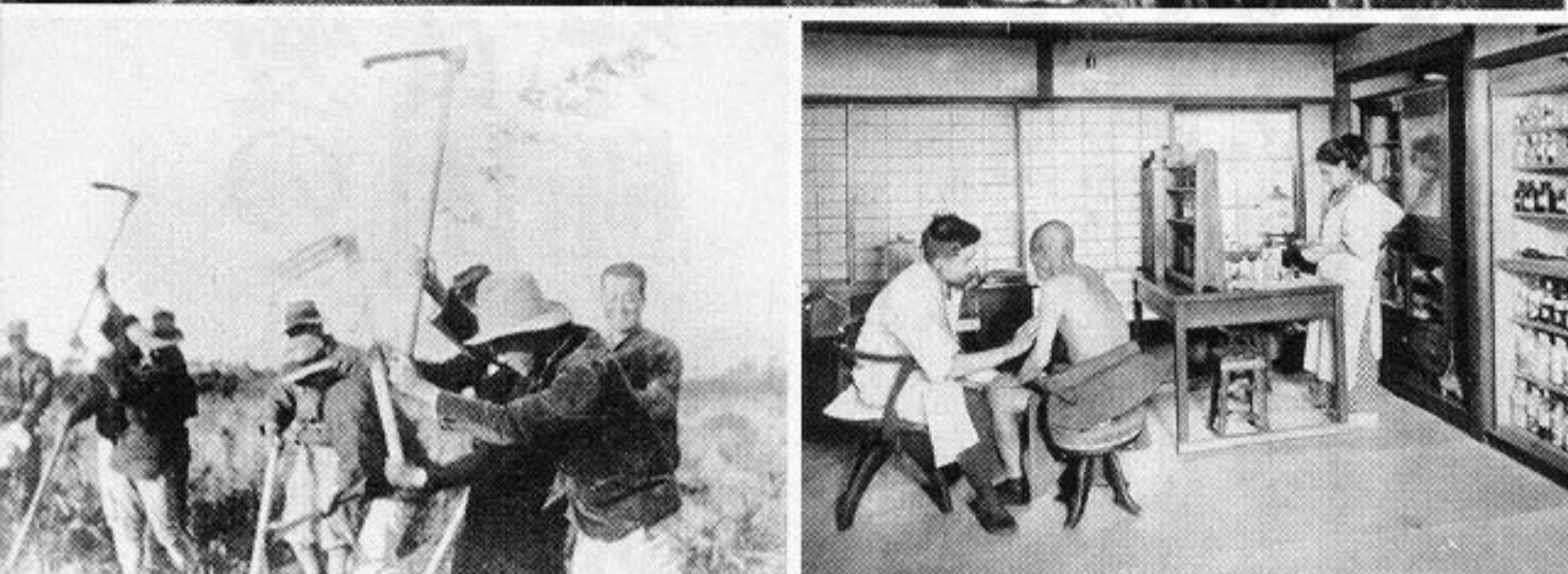
その集大成が『ブラザーフッド・エコ

ノミクス（友愛の経済学）（ハーパー社）という本。一九三六年にアメリカ、ニューヨークのロチェスター大学での講演が出版されたもので、またたく間に十カ国語に翻訳され、二十五か国で出版されました。日本では忘れ去られている賀川の「経済理論」が、欧米でもはやされていたというから驚きです。

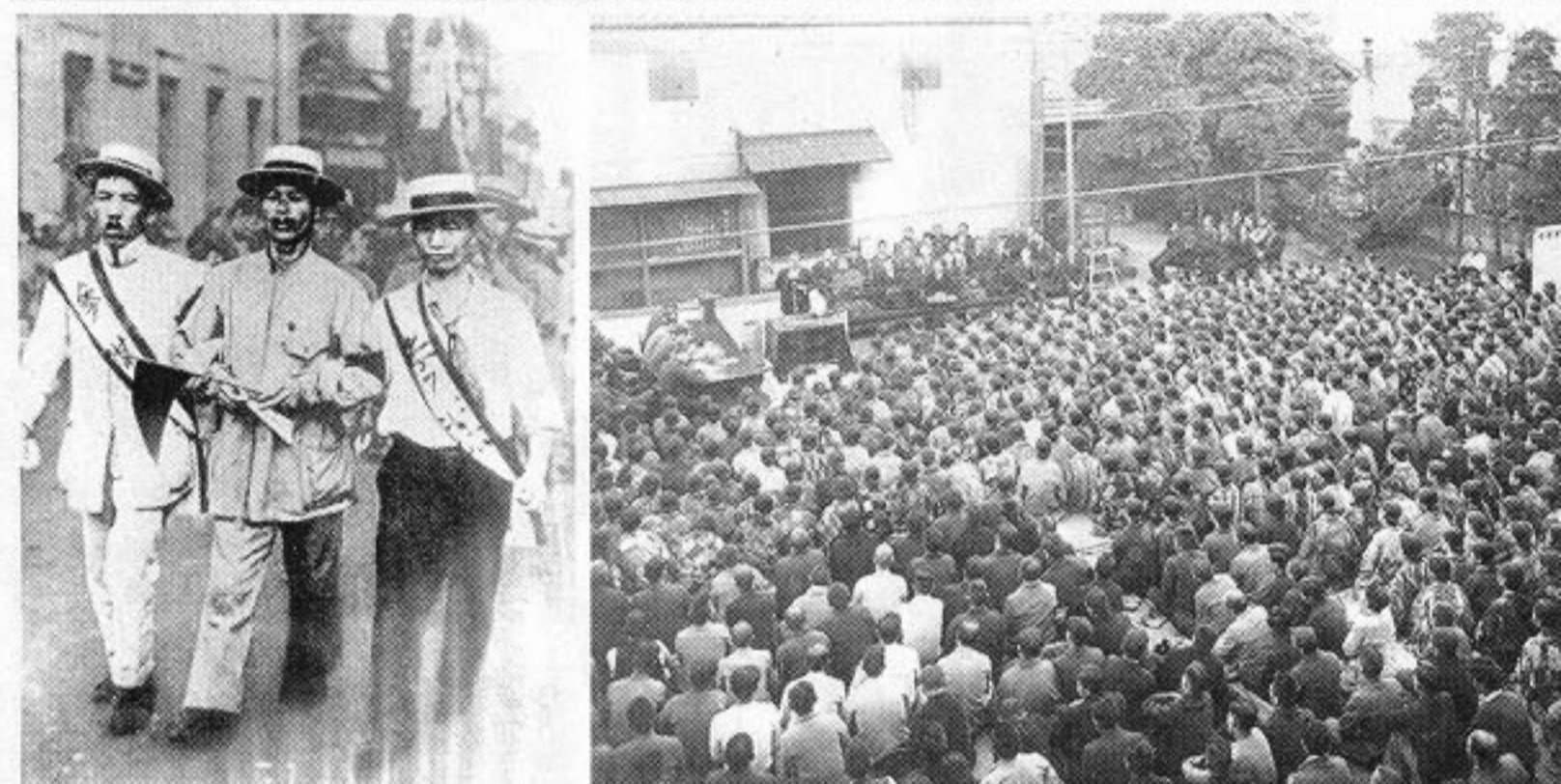
一九二九年の世界大恐慌によって資本主義は信頼を失い、社会主義が台頭します。賀川は資本主義を「搾取的」と批判する一方で、社会主義の暴力に反対しました。そして、第三の道として提示したのが、キリスト教愛に基づく「友愛の協同組合経済」だったのでした。

愛のない経済こそが、貧困と紛争をもたらし、究極的に戦争に至るというのが賀川の信念でした。『ブラザーフッド・エコノミクス』は、経済理論であると同時に平和論でもありました。国境をなくして世界連邦をつくるという賀川の構想は、EU（欧州連合）の基礎を形づくったともいわれています。

鳩山政権は友愛外交を標榜ひょうぼうしていますが、EUの父といわれるクーデンホーフ・カレルギー伯の『汎欧州論』と、賀川の『ブラザーフッド・エコノミクス』は、ヨーロッパでは統合のバックボーンとなっています。そう考えると、東アジアが共同体をめざすときに、かならずや賀川の考え方に光が当てられるはずで



困難をかかえる人々に寄り添って生きた賀川。神戸のスラムの子どもたちと（上）。イエス団友愛救済診療所（右）。浜松聖隷保養農場の開墾鋤入式（左）



1950年、ノルウェーでの野外講演(上)。千葉県での産業組合大会の様子(右)。1921年、神戸川崎・三菱造船所労働争議のデモ行進(左)

# 愛のない経済こそが、 貧困と紛争をもたらし、 究極的に戦争に至る



クルミを持つ賀川。米に加えさまざまな作物から収穫を得る「立体農業」を提唱

## 医療や共済から 農業、工業まで

賀川が関係した事業で忘れてならないのは、幼児教育など社会福祉事業です。

東京の雲柱社、神戸のイエス団では、合計百か所の事業所をかかえ二千人が今も働いています。その後発展したものには

「コープこうべ」「大学生協」「全国生協連合会」「労働金庫」「全労済」などがあり、幅広い分野にまたがっています。

そのほかにも、いくつかユニークな事業を紹介します。

まずは、東京医療利用組合(現中野総合病院)の先駆的役割です。きっかけは

農村の貧しさでした。健康保険のない時代、医療費が高かっただけでなく、農村部にはそもそも病院が少なかったのです。

事態を打破するため、産業組合(JAの前身)に病院を経営させようとなりました。最初から農村部で運動したのでは影響力

も小さいと考え、あえて東京で組合病院設立を申請します。予想通り、医師会の猛反発があり、政界を挙げての反対運動

となりました。賀川は新渡戸稲造など良識派を先頭に

立てて設立運動を展開し、一年以上かかって認可を取り付けます。反対運動が盛り上がったおかげで運動は列島全体に広がり、産業組合による病院設立が燎原の火のごとく広がったのでした。現在、百か所ほどあるJA厚生連傘下の病院の多くは、そうした経緯で誕生したのです。

東京の中ノ郷質庫信用組合は、関東大震災後のセツルメント運動の中から生まれました。人々の生活が疲弊するなか、

賀川はまた、貧しい人たちのためにこそ、生命保険が必要だと考えました。協同組合による保険業の経営を考えましたが、保険業法の壁は厚く、果たせませんでした。その代わりに戦争中に、産業組合による既存の保険会社の買収に成功しました。現在の共栄火災海上保険です。

戦後になってようやく協同組合による経営が認められ、現在のJA共済が誕生しました。全国組織として全国共済農業協

同組合連合会(全共連)となったのは一九五一年のことです。賀川は共済の生みの親でもあるのです。

質屋が暴利をむさぼるようになっていました。滝野川で質屋を経営していた奥堂定蔵が義憤を感じ、賀川に訴えたことが創設のきっかけです。現在も十九支店をかかえ、信用組合としては有数の規模を誇っています。東京の下町で担保主義をとらない経営には定評があります。

このほかに、時計などを製造するリズム時計工業株式会社。源流は賀川が戦後、埼玉県桜井村(当時)に創業した農村時計製作所だったというのだが、驚きです。賀川は農民運動の一環として「立体

## ◆賀川豊彦の歩み

1888年	兵庫県神戸市に生まれる
1893	父母の死去により姉とともに徳島県の生家に引き取られる
1900	旧制徳島中学校に入学
1904	宣教師H・W・マヤス博士より洗礼を受ける
1905~1911	明治学院高等部神学予科(東京)、神戸神学校で学ぶ
1909	神戸のスラムに住み、救貧活動を始める
1914~16	プリンストン大学、神学校(アメリカ)で学ぶ
1919	購買組合公益社(大阪)を設立 大日本労働総同盟友愛会の組織改革を行い、労働争議への指導態勢を整える
1920	自伝的小説「死線を越えて」が大ベストセラーに
1921	神戸購買組合、灘購買組合を設立(現在のコープこうべ) 神戸川崎・三菱造船所労働争議を指導 イエスの友会、日本農民組合を設立
1922	『雲の柱』発刊、(財)イエス団設立
1923	関東大震災で被災者の救援活動を東京・本所で行う
1926	東京学生消費組合(現在の全国大学生活協同組合連合会)を設立
1927	江東消費組合(東京)を設立 兵庫県武庫郡瓦木村の自宅で第1回の農民福音学校を開催。その後、全国各地で開催
1928	東京・中ノ郷質庫信用組合を設立
1932	東京医療利用組合を設立
1934	『家の光』で『乳と蜜の流るゝ郷』の連載開始
1935	『ブラザーフード・エコノミクス』(友愛の経済学)の講演をニューヨークで行う
1938	財団法人「雲柱社」設立、初代理事長となる
1945	戦災者の救護、東久邇内閣参与。 日本協同組合同盟(現在の日本生活協同組合連合会)結成。初代会長に就任
1946	国際平和協会を設立。賀川が初代理事長となる
1947~48	ノーベル文学賞候補に挙げられる
1954~56	ノーベル平和賞候補に挙げられる
1960	71歳で死去

農業」を主張しました。簡単にいえば、米麦穀物ばかりに頼るのではなく、シイタケやクリ、クルミを植え、ヤギやヒツジを飼って乳を搾って自給すれば飢えずにすむ。加えて現金収入を得るために農村に工場が必要だと考えていました。小説『幻の兵車』(一九三四年、改造社)の中にもそのことが書かれています。

農村に工業をという長年の夢が戦後一九四六年に実現します。旧陸軍の工場跡地に時計工場と時計技術講習所を設立。全国農業会が資本金三百五十万円の八割を出資しました。結果的に四年半で経営は行き詰まり破綻しますが、農村時計のブランド名「リズム」を社名として、シチズンの出資を得て復活しました。

ノーベル文学賞候補にも  
作家としても才能を發揮した賀川。小



「共済が日本を救う」と、共済農業協同組合のために書いた賀川の書(右)。1948年の神戸消費組合(現・コープこうべ)の建物(左)

日本の再建は生命共済から  
農村復興は協同共済から  
長期資金の獲得に始まる  
一九三〇年、  
賀川豊彦

説『乳と蜜の流るゝ郷』は福島県の貧しい農村を題材に主人公の田中東助が協同組合と立体農業を学びながら成長して、村の復興を果たす物語です。月刊誌『家の光』で一九三四年から連載されましたが、連載中に雑誌の販売部数がほぼ倍増するほどの人気でした。一九五四年から三年連続してノーベル平和賞候補となったことは知られていましたが、このほど四七、四八年の二回、当時としては日本人で初めてノーベル文学賞の候補者であったことも報道されています。

毒舌のジャーナリストとして知られた大宅壮一が、賀川の死後に書いた有名な文章があります。明治維新以降、日本人にもっとも影響を与えたベストスリーに賀川の名を挙げ、こう述べています。

「西郷隆盛、伊藤博文、原敬、乃木希典、夏目漱石、西田幾多郎、湯川秀樹などと

云う名前を思いつくままにあげて見ても、この人達の仕事の範囲はそう広くない。宗教の面はいうまでもなく、現在文化のあらゆる分野に、その影響力が及んでいる。大衆の生活に即した新しい政治運動、社会運動、組合運動、農民運動、協同組合運動など、およそ運動と名のつくものの大部分は、賀川豊彦に源を発していると云っても、決して云いすぎではない」

時代は移り変わっても、社会がかかえる矛盾や問題が年々大きくなっていくことは、当時も今も似た状況だといえます。賀川の行動と志に、わたしたちが学ぶことは決して少なくはありません。

ばん・たけずみ 一九五一年高知県生まれ。東京外国語大学卒業後、共同通信社に入社。『NEWS』編集長などを経て、現在、ニュースセンター整理部長。著書に『追跡NIEES経済』『日本がアジアで敗れる日』など。賀川豊彦が初代理事長の国際平和協会会長も務める。



『復刻版 乳と蜜の流るゝ郷』(1995円)、  
『劇画 死線を越えて』(1200円)、家の光協会より賀川の献身100年を記念し刊行